

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 112 号

2020年 3月



第 168 回自然観察会:高山山麓・仁田沼雪上観察会

2月24日に仁田沼で雪上観察会を行いました。参加者は16名でした。地球温暖化が身近まで進んできたかと思わざるを得ないほどの暖冬で、計画では雪上観察会としてあるものの、今回は、落ち葉を踏みしめての観察会と覚悟を決めて仁田沼登山口に向かいました。

しかし、前日に、奇跡的に降雪があり、登山口からの斜面は一面、白銀の世界となっていました。10 cm 程度の柔らかい新雪の上を踏みしめてアカマツ林を登り切ると最初の観察ポイントであるクリーコナラ林です。ここではケヤキ、イタヤカエデ、クリ等の大木が残されており、林床は刈り払い後に芽生えたカエデ類などの実生が多く見られました。ケヤキのアガリコの古木や年輪のような病斑が珍しいがんしゅ病に罹病したイタヤカエデ、彫りの深い幹の表情が魅力的なクリ大木、カエデ類やアワブキ、ツリバナ、アオハダなどの冬芽をじっくり観察してから次の観察地、仁田沼に向かいました。途中の枝沢では雪が消えていたので落葉の鑑定にトライしました。仁田沼では安全を考えて、周回する予定を中止し、白い湿地に林立するハンノキを背景にお茶タイムとしました。美しい景観をしばし楽しんだ後、キツネのフィールドサインを追いながら男沼に向かいました。登り始めると一帯はイノシシのかく乱跡が広範囲にわたって見られました。昨年来、仁田沼はイノシシの食害によるミズバショウの激減が深刻です。なぜ、仁田沼にまでイノシシが出現するに至ったのか、その原因を探ることが求められます。

男沼入り口で昼食をとり、橋を渡って沼沿いのクリーコナラ林を男沼ハンノキ湿地林まで散策しました。途中からの対岸の景観は、この日しか見られない究極の絶景でした。ハンノキ湿地林では大きなこぶを形成したハンノキがあり、よく見ると他のハンノキにもこぶ症状が散見されることから病原性のものではないかと思われました。



仁田沼



男沼

仁田沼の雪上観察会に参加して 福島市 野中 文子

初参加させていただきましたが、とても和やかな雰囲気、豊富な知識をもつ皆さんに丁寧に教えていただき安心して歩けました。ありがとうございました。

自宅から見える稜線にひととき美しい姿の高山、ずっと気になっていて、でも、熊いるし、登山レポも皆無だし、どうやったら行けますか？と人に聞いているうちにこちらの会の活動をお聞きしました。長い間の保護活動と勉強会、私には敷居が高いなあ、と腰が引けていましたが今はもっと早く参加すべきだったと後悔です。

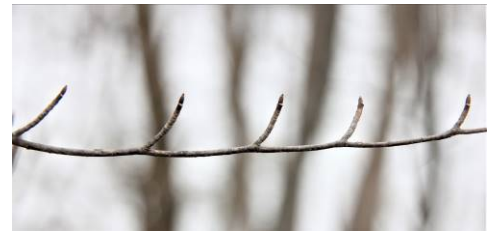
コロナウイルスや雪不足、世情は騒然、でも前夜にうっすらと積もった雪で覆われたアカマツの林や湖畔、静かな美しい森でした。充実した一日、感動ポイントは沢山あるのですが、まずパンフレット。フルカラーで写真がいっぱい、それが一週間前の下調べの時の写真と聞いて手抜きのない準備にびっくりしました。写真と実物を見比べながら歩くともとてもわかりやすかったし、聞き逃した点も確認できました。地元の森のリアルがよくわかって、ずっと大切に保存したいと思います。観察ポイントも明確で、ゆったりと歩いていたのに、終わってみればいつのまにかクリアしていました。①樹相の変化、いつもあやふやなヤシヤブシとハンノキ、この湿地林にはハンノキ多い、②冬芽と樹皮の姿、クリとコナラの見分け、色が濃くシワが深いのはクリ。アオダモの冬芽は上品な「鳩羽鼠」、アオハダの冬芽はツツツツと音符が並んでいる♪ ケヤキのアガリコ(盆栽みたい)は人々と森の共存の歴史、イタヤカエデがんしゅ病。カールの形成でわかる木の生い立ち。③フィールドサイン、狐の足跡はまっすぐ、モデルさんみたい(笑) ④冬でも元気な植物「コケ」、奥が深くてコケました。みんな考える森の勉強、楽しく記憶に残りました。地元の若い方の初参加も嬉しかったし、お昼にはおいしい手料理でたちまち森のレストランが開店したのもびっくりでした。(とてもおいしかった、ご馳走様でした)そしてなにより、感想を依頼されて改めて拝見したホームページの充実ぶり。この観察会が168回目にもなっているのですね。「創業は易く守成は難し」と聞きますが、30年も素晴らしい活動を継続してHPも管理・更新、本当にすごいと思います。自分も小さな日本語教室を主宰しているのですが、ブレない信念と静かなエネルギーを持ち続ける皆さんの活動に勇気付けられました。次回のスマレも参加したいですし、未踏の高山にもご一緒できますように、どうぞよろしくお祈りします。



ケヤキの古木にて



イタヤカエデがんしゅ病の観察



アオハダの冬芽



凍裂の観察



落葉の鑑定



イノシシの攪乱



ハンノキがんしゅ症状の観察

実はそれは荒縄だった。三日間の山行を終えて里のバス停までの林道を、六人の山岳部員たちがブラブラと一列になって歩いていた。そんな時後ろから二番目を歩いている私に最後尾のチーフリーダーが「オイ、ナガオカ見てみる、ヘビだ」と道端を指さしながら言った。仲間内では私のそれ嫌いは有名である。実物そのものは勿論のこと、写真やイラストどころかその名の文字を見るのも嫌である。その時私は指でさされた先の荒縄を見て、それが大嫌いなあの奴だと完全に勘違いしてしまった。ワア～だったかギャーだったかどちらか忘れたが大声で叫ぶと、前を歩く者のザックに体当たりをするように押して走り出した。すると押された者も同じく「ワーッ」と叫びその前を歩く部員を押した。そうやって順繰りに叫び声とザックを押される衝撃が伝達されて、みんなが林道を並んで一斉に駆け出した。やがて少しすると先頭が「オイ俺たちなんで走ってるんだ」と大声を上げた。私の前の三人も順送りに「なんでだ、なんでだ」と言ってその問いが私のところまで廻ってくると、走るのを止めた私が「ヘビですヘビ、長いやつ」と必死に訴えたその時、最後を歩いていたチーフリーダーがニヤニヤしながら「コレだよコレ」と言って荒縄をグルグル回しながらやってきた。

また五年ぐらい前東吾妻山に登った時のこと、私は山歩きを終えると大抵山の温泉を見つけて入っていくのだが、その温泉での出来事。露天風呂で今回もまた山旅を思い出しつつノンビリ浸かってから、脱衣所で腰にタオルを巻いて、山の涼風に吹かれて涼んでいると、窓から外を眺めながら話すふたりの男たちの会話が聞こえてきた。

「オイ見てみる、アレアレ」「うあ～ブツェ～(太い)やつだ」「ナッ、さっき言った通りだろう、あんな大きな抜け殻がそっくり残ってるんだから、その辺にまだ居るに決まってるって」私は横でこの会話のやりとりを聞きながら、だいたい内容はつかめた。彼らに向かって「何ですか?」と確かめるように尋ねると、ひとりが「青大将の親分、露天風呂の縁に大きな抜け殻があったでしょう、見なかったですか? あれは脱皮したばかりで、きっと近くに居ると話していたんだ」とその推理が正しかったというように自慢げに教えてくれた。私はその話を聞くなり、温泉で火照った体から血の気がサーッと引くのが分かった。ここでもまた言うが私には抜け殻だって駄目だ、ましてや本体なんてとんでもない。奴の近くに居ると思うだけでザワ～と鳥肌が立つ。その後はさっと素早く服を着て一目散に風呂場から逃げ出した。あれからあの温泉には一度も行っていない。そう言えば昔那須の秘湯と呼ばれる温泉に行き、湯船の縁に頭を載せて体を湯に浮かせるようにして伸ばし、天井の太い梁を感心しながら眺めていると、一緒に入っていた土地の人から、こういう秘湯に来たなら天井を見上げろと言われた。もしそこに太い梁が渡されていたなら、冬場その梁の上には大きな青大将が冬眠していて、たまに寝惚けたそいつが、ポチャンと落ちてくることもあると聞かされて、やはり青ざめたことを思い出した。ことほど左様に私は本当にアレは駄目なのだが、中央アルプスに登った時、重い荷物を背負って長い登り道を歩いていると、先輩から「オイきれいにとぐろを巻いてるぞ」と奴を見せられたことがあった。その時の私はそれをチラッと見て「アア～そうですね」と言って何の反応も示さず歩き続けた。人間究極近く疲れるとなんどの感情もわからないものなのかもしれない。



イラスト 長岡由江

「吾妻山周辺森林生態系保護地域の保全管理に関する検討会」報告

- 1 日時: 令和2年2月12日 13:30～15:30
- 2 場所: 伝国の杜(山形県米沢市丸の内1丁目2-1)2階小会議室
- 3 出席者:

東京情報大学: 理学博士原 慶太郎、山形県: 置賜総合支庁保健福祉環境部環境課環境保全主査齋藤暁人、環境省裏磐梯自然保護官事務所: 自然保護官補佐楊寛明、米沢市: 産業部 観光課課長佐藤明彦、吾妻の森と緑のトラスト運動: 代表高橋敬一(座長)、ネイチャーフロント米沢: 代表青柳和良、西吾妻山案内人クラブ: 顧問横正枝、代表安部國男、株式会社天元台: 代表取締役社長 山田長一、米沢山の会: 会長黒渾茂、北塩原村: 商工観光課 主査小林洋一、高山の原生林を守る会: 代表佐藤守、事務局長奥田博、会津森林管理署: 署長乾 光一、森林技術指導官星信義

置賜森林管理署(主催):次長多田由喜男、森林技術指導官阿部進、総括森林整備官島山悟(司会)、業務グループ係員安部俊介、米沢森林事務所首席森林官大戸剛

※欠席: 福島県自然保護課

今回の検討会では、「各団体等の取組及び課題等について」の報告に続いて当会が2000年以来継続してきた「西大巔周辺の登山道保全について」報告と意見交換が交わされました。報告は、当会に加え、会津森林管理署から、「行政機関による合同現地立会い」の実施とその結果についての報告がありました。これは関東森林管理局の機関として初めての公式調査で、関係機関による連携が新しい段階に進むことが期待されるものでした。

「西大巔周辺の登山道保全について」の報告と意見交換の概要は以下の通りです。

西吾妻周辺国有林野内登山道の行政機関による合同現地立会い実施報告(会津森林管理署)

1. 日時:令和元年8月20日(火) 2. 行程:天元台スキー場北望台4⇔西吾妻小屋⇔西大巔

3. 参加行政機関

環境省裏磐梯自然保護事務所(参加者2、以下同)山形県環境エネルギー部みどり自然課(3)山形県置賜総合支庁保健福祉部環境課(1)山形県米沢市産業部観光課(2)福島県生活環境部自然保護課(2)福島県福島市商工観光部観光コンベンション推進室(1)福島県耶麻郡北塩原村商工観光課(1)東北森林管理局置賜森林管理署(2)関東森林管理局会津森林管理署(3)

4. 目的:西吾妻山～一切経縦走線における西吾妻山周辺登山道の現状を関係する行政機関で現地を確認し、今後の管理に生かすべく現地立会いを実施した。

5. 登山道の管理状況

・環境省:公園計画

磐梯朝日国立公園計画にて西吾妻一切経縦走線(浄上平～白布峠)歩道として事業認定。登山道が山形県と福島県に跨ることから、**東大巔を境に東側を福島県、西側を山形県が事業執行者に認定されている。**

・山形県・福島県:管理区域の分担
登山道の整備実施にあたっては両県で協定を締結し工事を実施。登山道の貸付契約は工事の協定書により登山道が存在するそれぞれの県が申請を行う。維持管理については事業認定された区域により同県がそれぞれ分担し実施する。

・林野庁:登山道貸付契約状況

公園計画歩道のうち**木道等の整備を実施した区間のみ**が登山道敷として会津・置賜森林管理等で両県と貸付契約。契約相手方は、工事の際に同県で取り交わした協定により、山形県側に位置する登山道は山形県知事で、同様に福島県側に位置する登山道は福島県知事が貸付契約者となっている。

西吾妻山周辺の登山道は、山形県が公園計画により事業認定され整備してきた区域であるが、福島県側に整備されている箇所が多いため、多くの登山道の貸付契約者が山形県知事ではなく福島県知事となっている。

6. 各行政機関との現地立会いでわかったこと

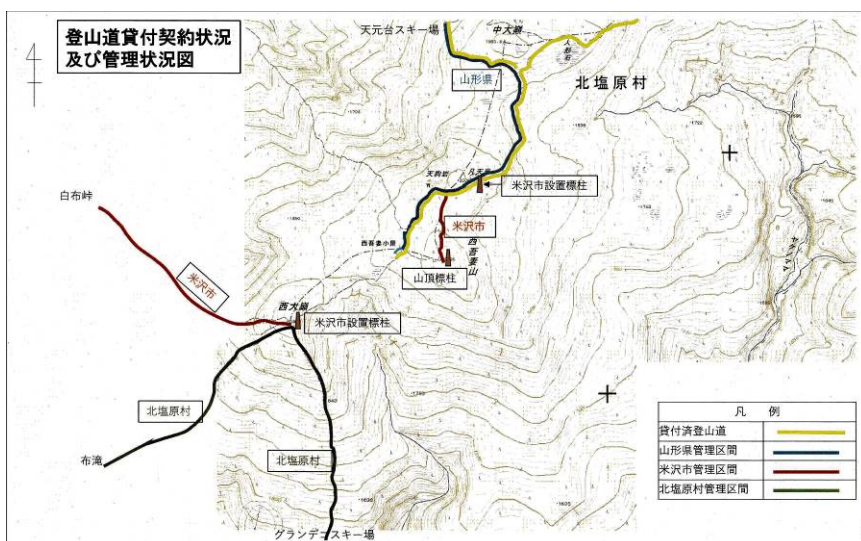
①西吾妻山周辺登山道の刈払等の管理は、山形県置賜総合支所、米沢市及び北塩原村で区域を分担して実施している。②貸付契約のされていない未貸付区間でも登山道の刈払や標識が設置され管理されている区間がある。・天狗岩～西吾妻山及び白布峠～西大巔の間を山形県が実施。・デコ平～西大巔～布滝は北塩原村が実施。・山頂標識及び道標が未協議で設置(設置者:米沢市)されている。(3箇所)③西吾妻山頂～西吾妻小屋～西大巔の間は管理している行政機関がない。(米沢市が管理)④貸付契約条項第3条において、借受者は貸付物件を自ら使用しなければならないこととしているが、東大巔を境に両県で管理区域を分担しており、**貸付契約者自らが使用していない箇所がある。**

7. 今後の課題として

①国有林と未協議の標柱が設置されている。⇒貸付契約の協議 ②国有林との貸付契約者である同県が、管理区域でない登山道も貸付を受けており管理状況の把握が出来ていない。⇒登山道の維持管理者と国有林貸付申請者の一致 ③今回立会した登山道の未貸付の箇所については、維持管理の主体が不明の箇所もある。⇒未貸付箇所の登山道について貸付契約の協議

8. 意見交換

○高山の原生林を守る会 佐藤



植物の保存、斜面の崩壊抑止等の有識者に現地を見てもらい専門的な知見から対策を検討することが良いと思われる。また、仮に事業(工事)を行うとなれば経費が伴うため、誰(どの行政機関)が負担するかの問題も生じる。会津森林管理署から指摘があった現状の複雑な行政の仕組みの問題も併せ、専門的な検討会を立ち上げその中で対策を講ずるべきと考える。

○吾妻の森と緑のトラスト運動 高橋(座長)

弥兵衛平の植生回復事業(ネーチャーフロント米沢主催)と違い、この場合は、朝日、飯豊連峰での保全作業(関係機関・団体による登山道及び周辺の保全作業。各協議会が主催)のような取組が有効ではと思われる。当会の次期代表の草刈氏(令和2年4月から高橋氏の後任に内定)は、長年この取組に参加しており保全対策の知識も持ち合わせているところ。次回から彼が本検討会に出席(高橋氏に変わり)することになる。今後、この課題の解決に向けた議論が深まることを期待している。

○東京情報大学理学博士 原

解決に向け次の2点の取組必要と思われる。①関係行政機関による仕組みの整理。②自然に対する物理的な修復。①については、各行政機関において知恵を出し合い、必要な手立てができる仕組みを作ることが必要である。また、山形、福島、米沢、北塩原にとって貴重な自然資本(吾妻山)であることを踏まえ、住民へのピーアール活動も行った方が良いと思われる。②については、八甲田山の登山道付け替え等を参考に、知人の有識者から情報を得るなどし物理的な対策を考えてみたい。一筋縄ではいかない課題ではあるが、関係者が知恵を出し合い、できることから進めていくしかないだろう。



鹿狼山から51 ～新型コロナ～

小幡 仁子

新型コロナウイルスの感染予防で、小学校中学校・高校は休校になっている。2月28日の金曜日にはランドセルの他に運動着や習字用具、絵の具セットなど、背中と両手に持ちきれない程の荷物を持って下校する姿が見られた。3月2日月曜日からの休校だから、大量の荷物を一度に持ち帰ることになったのだろう。しかし、小さな体には重すぎかなと思われる子供もいた。



鹿狼山に登る小学生達

さて、私は、カタクリがそろそろ咲いたかと思ひ鹿狼山に来た。平日は中高年だけの静かな山であるが、新型コロナの影響で、小学生や中学生が次々と元気よく登ってくる。中学生は女子3名だった。いつまで休みは続くのか?という私の問いに「ずっと4月まで。体、なまっちゃう～」という返事だった。「山は、コロナないからいいの～」とも。走るように登ってきているから、ほっぺが赤い。エネルギーが有り余っているようで、鹿狼山神社への階段も走って登っていく。その後にははあはあ息を切らした女性が登ってきた。中学生の誰かの母親でもあろうか。中学生の軽やかさとは反対で、杖にすがりながら歩いている。大人が中学生について登ってくるのは大変なことだ。

次は、小学生の男の子と女の子が登ってきた。やはり、競争するようにばたばた登ってくる。「じーじ、早く～」と下に向かって叫んでいた。腕に孫達のジャンパーを抱えておじいさんが登ってきた。白髪頭に汗をかいていた。ああ、こんな元気な孫達を相手にするのは大変なことだ、頑張れファイト。と、密かにおじいさんを応援して頂上を後にした。

私は、いつものようにゆるゆると下山した。間もなく登山口になるところで、先ほどの小学生達に追いつかれた。登ってきたときと同じように小走りだ。「元気だね。何年生?」と聞くと、男の子は「1年だよ。こっちは3年」と女の子を指した。おじいさんもやってきた。「大変ですねえ」と声を掛けると「あだま、いだぐなる(頭、痛くなる)」と一言。私は思わず忍び笑いをしてしまった。察するに、子ども達の両親は仕事に出て、祖父母が面倒をみることになったのだろう。学校に行っていれば、友達と勉強したり遊んだりして、そのエネルギーを余すことなく使い切るが、祖父母の家ではそうはいかないだろう。「頭、痛くなる」くらい頑張っているわけだ。

休業になってから2週間が経つ。例年は4月6日に入學式となり、新学期が始まるが、それともなることやら。あと3週間で新型コロナは終息するのか?連日の報道を聞くと、感染は世界中に広がって行くばかりである。誰もが不安の中にいるようだ。

それにしても子ども達は元気で屈託がない。コロナの心配をしないうで、鹿狼山を楽しく歩いてもらいたい。今日、カタクリは蕾だったが、来週には咲くだろう。キクザキイチゲは2、3輪咲いていた。エンレイソウや小さなスマレたちも花開く時を待っている。世の中に何が起ころうが、季節は巡っていく。そのうち、いいこともあるだろうから。(2020/03/16 記)

東北ブナ紀行（72）

奥田 博

宮城県のブナ林は、金華山と南部の阿武隈山地以外、多くが奥羽山脈に集中している。北から栗駒山、須金岳・禿岳などの鬼首高原、船形連峰、二口山塊、蔵王連峰、合わせて20山程度と東北六県では最も少ない。

109) 北泉ヶ岳 1253m



山頂が近くなって、登りの辛さを忘れさせるブナ

仙台市民には馴染みの深い泉ヶ岳。冬でも山頂を訪れる登山者が多い。その北1kmに北泉ヶ岳がそびえる。泉ヶ岳は陽、北泉ヶ岳は陰、そんな例えのように静かで地味な山頂である。

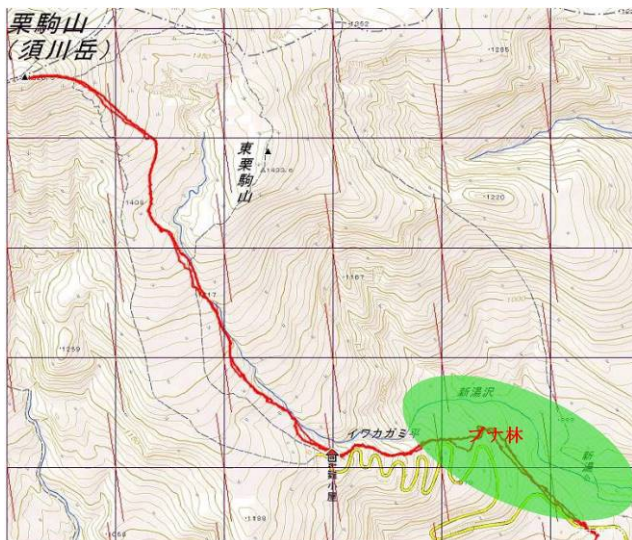
冬はスキー場のリフトを使うと標高 900mまで一気に運ばれる。スキー場から北泉ヶ岳と泉ヶ岳に挟まれた広い谷の中に入ると静寂が周囲を包む。ブナ、ミズナラ、サワグルミ、カエデ類など種々の木々混在している。ウサギやテン、タヌキなどの足跡が雪の上に続くので、動物には棲みやすいのだろう。谷から尾根に上がる 100m余の急な斜面を登ると、ブナの森が一気に広がる。

尾根を東に向かえば泉ヶ岳だが、見事にブナの森はない。一方、北に向かう尾根は山頂までブナに覆われる。特にコル付近は穏やかな大地にブナの森が広がって、心休まる場所だ。コル付近の登山道脇には「四本桂」と呼ばれる見事なカツラの木が主のように我々登山者を見下ろしていた。

コースタイム:スキー場終点(1時間 10分)尾根(1時間)山頂(1時間 30分)登山口

110) 栗駒山 1627m

イワカガミ平から栗駒山へのコースにブナ林はない。春先、イワカガミ平への除雪を終えるまでは、下から歩くことになる。その積雪期コースを歩く時のみブナに出合える。積雪期に訪れる者、限定の森だ。



古い看板を付けたブナの大木

昔、いこいの村が建っていた場所で、道路はゲートが閉じている。ここからスキーを着けて歩き出す。道路を外れて森に入ると、太いブナに1という看板が括り付けられている。まだ道路のない時代から、ここは冬山コースだったのだ。クラシックコースだった証に、古い看板も見られた。大木も多く残るが、イワカガミ平からの冬ルートは沢の中をたどり、一枚バーンの斜面は山頂まで続く。

コースタイム:登山口(1時間 10分)イワカガミ平(2時間 10分)山頂(1時間 30分)登山口

吾妻・安達太良花紀行 80

佐藤 守

センダイトウヒレン (*Saussurea nipponica* Miq. subsp. *sendaica* (Franch.) Kitam. キク科トウヒレン属)

高山山麓のクリーコナラ林の林縁に植生する多年草。日本固有種。トウヒレン属には垂直分布ですみわけが見られるシラネアザミとオウダイトウヒレンを基本種とする多くの種があり、識別が難しい花の代表格である。しかし、近年は DNA 解析による分類法が開発されるなど分類の見直しにより、旧来の種名の統合が進んでいる。トウヒレン属も同様で、南東北の山岳で報告があったクロウヒレンやフボウトウヒレンはシラネアザミに統合された。センダイトウヒレンはオウダイトウヒレンの亜種とされ、太平洋側低山に分布するトウヒレンとして、関東地方に植生するアサマヒゴダイといわき地方あたりを境にすみわけていとされるが、形態的な差異は連続的なものかもしれない。

葉は互生。葉身は草質で卵形になり、先は鋭尖頭、基部は切形から心形、縁に粗い鋸歯がある。葉柄には狭い翼があり、葉の表裏には微毛が散生する。根生葉は楕円～長楕円形で葉縁に細かい刺がある。花時には根生葉は残らない。アサマヒゴダイは残る。

花は頂生、茎の上部に頭花を散房状または総状に着生する。頭花は全て筒状花である。総苞は緑色の鐘型で総苞片は 6～11 列である。総苞片の列数は、総苞最外片を起点として、それに隣り合って、かつ内側に位置する総苞片を数え上げる。最内片は赤紫色を帯びる。アサマヒゴダイの総苞片は 5 列で総苞片の数が少ない。赤紫色の裂片で縁どられた総苞片から放たれた様に多数の筒状花が咲く姿は、刺し子に刺された多数の待ち針を連想させる。また、赤紫色の最内裂片、淡桃色の花冠、淡黄色の葯、白く長い花糸と輪状の柱頭に至るグラデーションは清楚で気品がある。

センダイトウヒレンの花には桑折町西山城跡に隣接する 2 次林で初めて出会い、その翌年に高山山麓でも自生しているのを確認していた。それ以後、阿武隈山地の複数の山でも同様の特徴を持った個体に遭遇している。実は、上記のようなことからセンダイトウヒレンも最近、アサマヒゴダイに統合されたい。しかし、センダイトウヒレンは宮城・福島・茨城 3 県に植生するオヤリハグマと分布域がほぼ重なっており、何らかの地域的な環境を反映していると考えられる。また、センダイトウヒレンは東北大学植物園の HP にも掲載されていることからセンダイトウヒレンとして紹介することにした。



ムラサキヤシオ (*Rhododendron Albrechtii* ツツジ科ツツジ属)

吾妻・安達太良連峰のブナ林から亜高山帯にかけての林縁や溪流沿いに植生する落葉低木。日本固有種。ツツジ属の中でレンゲツツジ亜属に属するレンゲツツジ、シロヤシオ、アカヤシオ、ムラサキヤシオは花の特徴は似通っているが、花冠の色彩が異なっている。

葉は互生。枝の先端に 5 枚の葉が着生する。同じく 5 葉タイプのアカヤシオ、シロヤシオは輪生するが、ムラサキヤシオは輪生しない。5 葉の内 1 葉が他より大きい。葉身は倒卵形または広倒披針形で、質はかたく、表面に微毛がある。葉縁には細かい鋸歯と腺毛がある。葉の先端には腺が着生する。

花は頂生。純正花芽で 1 つの芽から複数の合弁花を咲かせる。開花は葉の展開とほぼ同時である。花冠は深く 5 裂するため花卉の様に見える。雄しべは 10 本でその内、上部の 5 本の花糸は短い。短い花糸の基部には白毛が密生するが、長い雄しべは無毛である。ブナ林下部からミズナラ林に植生するトウゴクミツバツツジも雄しべは 10 本であるが花糸に長短はない。葯は灰紫色。雌しべは長く柱頭は黄緑色。花の基部には緑色の斑点がつく。蕾は深い赤紫色。開花すると鮮やかな赤紫色を呈する。株により色調に濃淡が見られる。

自然林には多彩な緑があるのと対比するように多様な赤色がある。ブナ林の新緑が整った頃に吾妻連峰や安達太良山に登ると、山麓付近ではオレンジがかったレンゲツツジや明るい桃色のトウゴクミツバツツジの花の出迎えを受ける。ミズナラ林を抜け、すがすがしいブナの新緑の森を登っていると、ほとんど突然に鮮やかな赤紫色のムラサキヤシオの花に遭遇する。森の緑の光はムラサキヤシオの花冠を多様な赤い色彩で演出し、裂片の反射光で雄しべの花糸は赤く染まる。



第169回自然観察会案内：小鳥の森・春の息吹観察会

日時：2020年4月12日（日）9：00～15：00

集合場所 小鳥の森第一駐車場 集合時間 9:00 参加定員 20名

内容 里山に春を告げるスプリングエフェメラルやスマレ、馬酔木などの早春の花を訪ねます。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)

申し込み：

4月10日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

新型コロナウイルス感染を避けるため以下の点に留意してください。

- ・自宅を出る前に体調の悪い場合は、無理しないでください。
- ・自宅を出る前に検温をお願いします。
- ・マスクをご持参願います。



第170回自然観察会案内：石田ブヨメキ湿原の植物観察会

日時：2020年5月3日（日）9：00～15：00

集合場所 小鳥の森第一駐車場 集合時間 9:00 参加定員 20名

内容 阿武隈山地では珍しい湿原の湿性植物を観察し、さらに湿原を抜けて里山の新緑を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)

申し込み：5月1日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア(NF 米沢と共同：詳細は佐藤守まで)

1. 実施日：今回は平日にガイド協会の支援を頂けることになりましたので2回に分けて実施します。

【平日】2020年6月8日(月)8時00分～16時00分(雨天時6月10日(水)に順延)

【休日】2020年6月13日(土)6時30分～16時00分(雨天時6月14日(日)に順延)

2. 定員：10名(山岳での行動において自己管理のできる方)

3. 内容：西大巓山頂から西吾妻小屋までの誘導ロープの設置作業を行います。

4. 集合場所：平日はグランドコススキー場駐車場8時00分(ここから林道を走行してデコ平湿原駐車場まで移動します)休日は四季の里交差点正面入口駐車場 6時30分(6/8 実施済の場合は天元台より入山します)

5. 申し込み：6月6日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

今年は新聞を通じて一般公募もします。

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第112号 2020年3月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・小幡